

房 総 の 剣 の 流 祖

鈴木 政 男(関東学 園 大学)

剣道には諸流、諸派、徳川時代には二百余流の流派を数えると言われているが当千葉県から出た流祖について述べると足利時代剣道中興の祖と言われる香取神道流の始祖、飯篠山城守(後伊賀守)家直と一刀流の祖、徳川初期の小野次郎右衛門忠明の二人であると言ってよい。

飯篠山城守家直

前述のように香取神道流の祖と言われる人で、この流は詳しく言うと天真正伝香取神道流と言う。家直の墓碑は香取神宮の第二鳥居を左折して行なった所にあり、この墓碑のある所が家直の武芸修練の所であったと伝えられている。

本朝武芸小伝巻之五によると香取郡飯篠村(現香取郡多古町飯篠)の生れ(1387年元中4年)で後山崎村(現佐原市丁字字山崎、香取神宮北東隣接地)に移りとある。

又幼少の頃から刀槍の術を好み、精妙を得、常に鹿島、鹿取の神宮に祈るとある。一時は京都にのぼり足利將軍義政に仕えたが程なく宮を辞して故郷に帰った。それから山崎に移ったと思われる。

家直は刀槍を好みとあるから各種の武芸に秀でていたものと思つて差支えない。本朝武芸小伝によると「常陸鹿島の神人(神に仕える人)、其の長たる者七人、刀術をもって業となし今に至る関七流と号する者は也」とあり、家直が常に鹿島、鹿取の両神に祈り、天真正とはこの両神のことだと言うところからすると鹿島の関七流との交流もあり、武人の信仰の対象として両神を敬い修業の結果、開眼に至ったものと推測される。そして武術の確立があり流儀化で神道流を称えたものだろう。神道流は近世武術の源泉として各方面に発展する。

家直の門人に常州(常陸の国)江戸崎に諸岡一羽と言う人が居り、兵法の名人で師の家直に勝るとも劣らないと言われ、諸岡の門人に根岸兎角、岩間小熊、土子上只助の三名があり、いずれも精妙を得たと言う記録がある(上記について逸話もあるが省略)

又塚原卜伝と言えは知る人も多いが、この人は1940年常陸国塚原(現鹿島郡鹿島町須賀)で卜部あき賢の二男として生れ、塚原土佐守安幹やすとの養子となった。卜伝の養父塚原安幹は飯篠家直から天真正伝神道流の印可をうけていたので養父から神道流の指導され、鹿島神宮に参籠して更に研究工夫し開眼して心当流と称するようになった。従つて卜伝も家直の影響を強くうけている。

今一人家直の門人で松本備前守政信と言う人を挙げて見よう。備前は鹿島神宮の祝部(神宮)四家の内の一家である松本家に生れ(1467年)家直から神道流を学び刀術のみでなく、各種の武芸にすぐれ前述の卜伝の心当流もその源は備前にあつて卜伝によつて完成されたものとも言われる。

家直はかく武芸の研究工夫の上天真正伝神道流を編み出し秀いでた門人を輩出して剣道中興の祖として、足利時代中條流(中條兵庫之助長秀を祖とする流)と並び二大流派の一人として名を挙げた。

小野次郎右衛門忠明

祖先は大和国の住人で十市兵部大輔遠忠の末とあり、父は里見安房守の臣で武芸小伝には上総の人とある。小野派一刀流の始祖と言われた次郎右衛門忠明（以下忠明と言う）は神子上典膳と言って幼少の頃から刀槍を好み、師の伊藤一刀斎が上総に来たとき、一刀斎に宿舎を尋ねて試合を申込んだが及ぶべくなく、その弟子入りをして教えを乞うた。（師の伊藤一刀斎についてはいづれ別の機会にゆづる）一刀斎が翌年安房に来て「技術を天下に輝きたいと思うならば吾と諸州に遊べ」即ち諸国を慢遊して修業せよと言った典膳も承知して一刀斎に従って諸国修業の旅に出る。

一刀斎の今一人の門人に善鬼と言う者が居る。善鬼は舟頭をして居り体力・腕力に秀れていた、一刀斎がたまたま舟に乗ったとき、一刀斎に技か体力腕力か試合をして見ようと挑戦したが善鬼は敗れて弟子入りをした人である。

二人弟子は夫々特長をもって対角的であった。前述の如く善鬼は元来の身体に加えて技術を身につけて典膳より技術に長じていたが心がよくなく、いつか師の一刀斎をとねらっていたと言う。一方典膳は技術も善鬼より劣るとは言うものの人間が立派で師の教えもよく守り、一刀斎は典膳に流の印可を与えたいと日頃から考えていた。善鬼は日頃の一刀斎の心を察知して機会あれば師の巻物をと機会をうかがっていたが或るとき、それを持ち出さんとした所を師の一刀斎に見つかって逃げるのを師は典膳に一刀を与えて善鬼を漸れと命じた。典膳は追いかけて善鬼は逃げ切れないと判断して紺屋の大瓶の中にかくれた所に追いついた師弟は師の命で瓶の中の善鬼を瓶ごと真二つに漸り善鬼は落命したとあるから善鬼は師からよほど良く思われていなかったようである。一説には善鬼が早く世に出るのには師を失うのが早道として泊り泊りの宿で一刀斎をうかがっていた一刀斎は彼の心中を見抜いて要心していたと言う説もある。

一刀斎は江戸について徳川家康に剣の技を被露し家臣に召抱えられると言う話があったが拜辞して神子典膳を推挙した。典膳はここで徳川家の家臣となって母方の姓の小野をついで小野次郎右衛門忠明と名乗り二百石で召抱えられる。一刀斎から学び剣の奥義をきわめ秀忠の剣の師となった。関ヶ原の戦^註（1600）のとき信州上田城攻めで戦攻があり上田七本槍と称されたが軍律をみだしたと言う罰で幸田信壽にあづけられたが同六年許されて四百石に加増され更に六百石となり大阪夏の陣にも参加した、寛永七年（1628年）11月7日死去した。知行地は上総山辺、武射両郡をたまわっていたが領民からも慕われ成田市永興寺に墓所がある。

忠明の子供に忠常、膳忠があるが忠常を二代とし三代忠於、四代忠一、五代忠久、六代忠方、七代忠喜、八代忠孝、九代忠貞、十代忠政といづれも小野次郎右衛門がついて徳川時代に小野派一刀流は柳生流と共に繁栄している。

小野派一刀流を汲む中西派中西忠太子定から浅利又七郎義信その子供の浅利又七郎義明、千葉周作等その外幾他の剣客が出ている詳略することにするが十一代目を山岡鉄太郎高歩（一刀正伝無刀流）と称せられているが山岡鉄太郎は明治二十一年七月五十三才で死去された。

かくの如く小野次郎右衛門常明は小野派一刀流の流祖として徳川時代の代表流派の一としての礎をつくった。

（1983. 3. 5受付）